

豊福の歴史

竹崎城について

竹崎城跡は、竹崎地区の高台の清香園と九州自動車道の陸橋をはさんで東側の山にあり、主郭跡とされる山頂部に石碑が建てられています。標高 74.8 m の小山塊が、元寇の勇士竹崎季長(たけざきすえなが)の居城跡と伝えられる竹崎城跡です。城跡の西側には標高 59.7 m の江上寺山(現清香園)が立ちふさがり、城の出丸的役割を果たしていたと思われます。城跡とそれとの間には、南北両側より2つの迫が入りこみ(現在、高速道)、その出会った面と南側斜面には20度近い帯曲輪があり、よく中世城郭の特徴を表しています。

しかし、昭和48年からの城郭調査結果では、竹崎季長在世の鎌倉時代までさかのぼる可能性はなく、室町時代築城のようです。これにより、竹崎季長の築城説は否定せざるを得ません。すなわち、竹崎城を竹崎季長と結びつけることは可能性が低いのです。しかし、室町時代の生活遺物の出土状況から、豊福城の前線基地として詰めめの城的役割を持っていたと考えられます。

もっとも数代後の季長の子孫によって、古代の交通の要所であった竹崎に築城された可能性は大きいし、豊福城との関連も問われています。

竹崎城を季長の居城とする伝承は、竹崎季長の出生地としての竹崎に古来から存在した中世城を関連づけた後生人(おそらく江戸時代中期)が付け足したものと思われます。

竹崎季長の出自については、従来阿蘇家臣と書かれているほか分かっていませんが、「蒙古襲来絵詞」の分析によって、玉名郡旧竹崎村出身の菊池一族の竹崎氏であろうとする説が有力です。また、その子孫には、名和氏家臣で豊福城主だった竹崎玄蕃允安清があります。

7月9日(月)に、8年ぶりに城跡を訪ねてみました。33年前に担任していた豊福小の6年生を連れて行ったことを思い出しました。梅雨晴間に、桜の木の緑は濃く、夏盛りを思わせました。



「竹崎季長城址」の碑



碑の下にある説明板